

現今の幼稚園保育法につきて

東 基 吉

現今本邦に於て、幼稚園事業に最も力を盡しつゝある一外國婦人と、嘗て斯道につききて語りたることありし時、余は幼稚園恩物の使用法に付き、かくくの新しい方法を採用しては如何、と陳べたりしに對して、婦人は「併しフレール氏の使用法によりて悉く幼児に弄ばしめんには、決してさる新奇の方法を採用する時間とはあるまじ」と答へられたることありき。此一言實に我國に於ても外國に於ても、婦人の……幼稚園に従事せる婦人の一況保守的傾向を代表せる好個の一例といふべし。よし幼児に取りて如何に興味深く、如何に自然的に、如何に教育的なりとも、尊ぶべき祖師の述べられたるものにあらざる以上は採用する

に及ばずといふなり。これ抑々、祖師に忠ならんと欲して、會々以て祖師の効績を滅却するものにあらずして何ぞや。

現今の幼稚園保育法は、保育者の不幸なる此傾向により、或は教育上の知識の殆んど缺乏せる年少無知の保育者の手によりて、幾多諸般の進歩に對して最後に位せるが如し。其結果たるや則ち知れるものは此點を捕へて、知らざるものは瀰次馬的に口を捕へて幼稚園其ものまでも無用の長物視せんとす。保姆の養保育法の改良は實に幼稚園のため、否可憐なる我が幼児のために、最大急務といはざるべからず。

現行法合によれば、一幼稚園に收容すべき幼児の定員五十名、一保姆の擔任すべき幼児數四十名一日の保育時數五時間以外、保姆は女子にして尋

常小學校教員、若しくは准教員の資格を有するものより取り、左の日課によりて幼児を保育すべしとするものなり。

一、遊戲、二、談話、三、唱歌、四、手技。

遊戲は之を別ちて、共同遊戲及隨意遊戲の二とす共同遊戲とは通例謂はゆる遊戲と稱するものにして、即多數の幼児を集め、遊戲室に於て、樂器に合はせて遊戲せしむるものにして、隨意遊戲とは幼兒をして各自隨意的に、自然的に、或は保育室に於て、或は運動場に於て、思ひ思ひに悠々遊樂せしむるものをいふ。談話は多くは修身の語にして、時々庶物の話を合せ用ふ。唱歌は即唱歌にして、手技は幼稚園恩物を用ゐるなり。

多數の幼稚園に於ては、之等の日課は一日五時間(食事時間を含む)を三十分づゝに別ちて配當せ

り。則八時より三十分の間唱歌せしむれば、次の三十分即ち九時までは遊戲次の卅分は手技、次は談話といふが如し。かくて一人の保姆が四十人乃至五十人の幼兒を集めて保育するなり。

遊戲、談話、唱歌、手技とは皆幼兒活動の發表の形式にして最も幼兒自然の本能より出づる嗜好に屬す。従つて之等の活動を利用して保育せば、則ち善良なる習慣の形成と強健なる身軀の發達とは、當然收むべき結果として顯はるゝは最も明白なれども、さりとして總べて他の場合と同じく、其方法にして誤るあらんか、之と反對に有害の結果を來たすことも亦明なりとす。

今此等各課につきて聊か、現時の保育法を批評せんか。所謂共同遊戲に於ては、常に最も多く唱歌と伴はしむるものなり。換言すれば唱歌しなが

ら、其意味を遊戯に於て顯はさしむるものにして
 通例の幼稚園に於ては遊戯室を備へ、此處に於て
 風琴若しくは洋琴を用ゐて行ふものとす。こゝに
 吾人が此遊戯に於て注意すべき點は、どこまでも
 遊戯的性質を失はざらしむることとなり。詳に云
 へば此遊戯をなすに當り、幼兒をして何處までも
 遊戯として感ぜしむべく決して仕事として感ぜし
 むべからざることとなり、尙一層詳言すれば之を
 なすに當りては、幼兒はよく其歌の意味と遊戯の
 意味とを聯結して知了し、彼等の心は滿腔の喜を
 以て司配せられ、其注意は此一點に集中せられ、
 彼等の顔面は此喜を以て輝き渡り、彼等の身軀は
 自ら活潑に、輕快に、動作するを禁ずる能はざる
 様ならざるべからず。由來幼兒は男女にかゝはら
 ず、輕快にして活潑なり。即ち遊戯も常に幼兒の此

傾向に投ぜざるべからず、余は或幼稚園に於て高
 尚なる唱歌に附するに復雜緩慢なる舞の手の如き
 ものを以てしたる遊戯を見たり、保母一人合點し
 て肝心の幼兒は全く無意味に、殆んど機械的に動
 作す。此の如き遊戯は其真正の生命を失へるもの
 といふべし。はた又行進の形を以て顯はるゝ多數
 の遊戯に於ても彼等が、小さき歩并揃へて樂器に
 併はせつゝ秩序正しく、規律的に種々の形を模す
 るを何て、保母は巧に彼等の遊戯を指導し遂げた
 りと速了する事もあらんか、併しながら元來舞蹈
 の初歩の如き規律的動作の調和を樂しむ心意は、
 頗る發達したるものならざるべからず。幼兒心意
 の發達力の盛なる、大抵の事は教ふるまゝに行ふ
 を得べしといへども、此の如き遊戯に於ては、心
 ある者まさにフレール氏の言ひけん、遊戯の眞

精神たる幼兒内心の自發的活動の表出甚だ僅少なるを認知すべし。

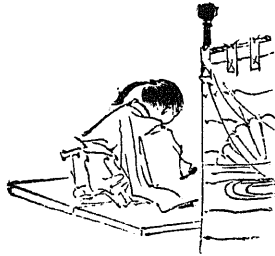
是に於て此時代に於ける幼兒遊戲の眞正の價値は、寧ろ反つて彼等の隨意遊戲に於て多く存するを見るなり。但し此場合にありては、幼兒の遊戲上必要なる凡百の自然的需用を以て具備せられたる園地の設ることを豫量せざるべからず。此如き園地は幼稚園に於て、最も缺くべからざる要素にして、風琴の如き、洋琴の如き、机腰掛の如き、黑板の如き、要は即要なりといふを得べけんも、到底缺くべからざる要素にわらず。廣濶なる遊戯場の一方には、自然の樹木蔭翳として、夏は則天の炎熱を覆ひて綠陰深き邊、清流の消々として掬すべきあり、春は則ち四邊の草花は自然の錦を織りなせるあり、彼方には丘陵囁ち、此方には砂原

あり、一言すれば凡そ出來べき丈けの自然地理的現象の備具せられたる、此の如き遊戯場こそ必要缺くべからざる要素なれ。幼兒はこゝ於て三々五五悠悠として、或は樹間に歌ふ小鳥を、友として共に歌ふべく、或は平野に驅くる家畜を友として共に馳駢すべし、自然の恩物は限りなく彼等に供せられ意の儘に此處に弄ぶことを許さる、此の如くにして、こそ彼等は眞に自然の子として自然の恩恵に浴することを得べく、此の如き境界に於ける所謂隨意遊戯の價値にはまた何人も否むこと能はざるべし。

此の如き見解を以て現今幼稚園の多數を見んか、殆んど猫額も管ならざる空地に無數の幼兒を逐ひ込み、或は全く空地を有せずして形ばかりの教場用具を備へ、併も學校衛生の範圍外に逸出せる

幽暗不潔の一室に彼等を幽閉し、放縦、喧噪、亂暴、狼藉に之れ一任し、而して敢て隨意遊戯の間なりといふ。滑稽の度を過ぎて吾は寧ろ幼兒の爲めに哭せんと欲す。

(未完)



海 水と陸との境

水の陸地に入込みたる處

浦、松林、茅屋、鹽焼く煙、漁船、漁網、さては漁火のゆらくとあるは欸乃の遠く聞ゆる

磯、波うち際に岩石の立ち並びて、漁翁の岩陰より釣を垂れたる、鵜の斜に水に翔けり入る

濱、平なる砂上に貝拾ふ童、潮淺き邊に海氣浴を試むる人々、

港、深く入り込みて、底深く、大船小舟の輻湊

せる、所謂文化の傳播の門戸たるもの。

川口孫治郎

